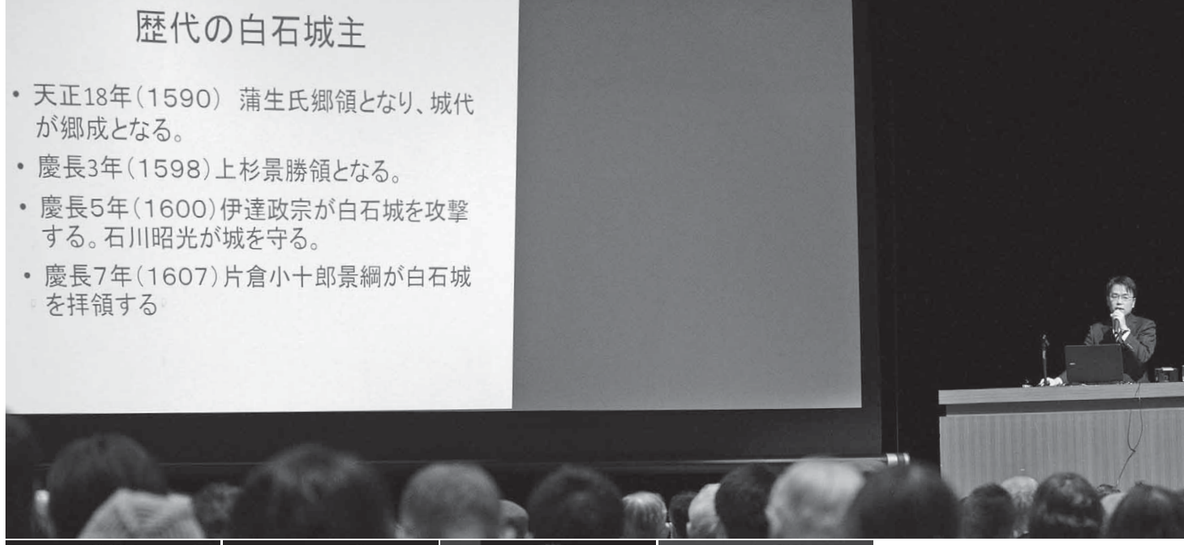

上_300人を超える歴史ファンが詰めかけたシンポジウム
下_講師を務めた学界をリードする研究者たち。左から金森さん、近藤さん、菅野さん、日下さん

歴史的な事実を掘り起こすことで　白石の新たな価値が育まれる

白石城震災復旧工事記念　上廣歴史シンポジウムin白石

片倉小十郎の城・白石城

市内外から集まった約300人が研究者の講演に耳を傾けた

2月2日、「片倉小十郎の城・白石城」と題したシンポジウムを中央公民館で開催した。このシンポジウムは、学界をリードする研究者が、震災復旧工事を終えた白石城にまつわるさまざまな歴史を、分かりやすく紹介しようと行われたものである。

発掘された白石城

まず、本市教育委員会生涯学習課の日下和寿学芸員が、戦国時代から発掘調査が行われるまでの概要などを説明。天文15（1546）年の記録に白石城の名が出てくるが、戦国時代の白石城の範囲はよく分からず、確実な証拠は見つかっていないことや、発掘調査で13～14世紀に遡る陶磁器が出土され、その時代から何らかの利用がなされていたことなどを話した。

続けて、現在の益岡公園がある山を利用して石垣を持つ近世城郭に大規模改修したのは蒲生氏と考えられ、それ以前は、土塁、堀、柵木などで作られた城山だった。城の規模は、江戸時代初期にその形が確定したのではなく、順次拡張された。そして、明治時代に入って順次、建物や石垣が解体・移築され、その後に公園となり、戦時中は軍の防空監視所も一時設置された。昭和時代の終わりころから、大きな樹木も育ち、桜の名所として親しまれてきた。平成2年から発掘調査を行い、三階櫓のあった箇所からは、異なる3つの時代の建物跡が発見された。大手門でも門の礎石、石垣や大量の瓦が発掘されたことなどを説明。さらに、1640年代に描かれた正保絵図では、白石城が2階建てになっていることにふれ、「江戸幕府の規制を無視した櫓の増築は考えにくい。階数を見誤ったか、本城の仙台城と支城の白石城の関係、また、絵図において意図的に軍事的機能を過小報告した可能性が高く、当初から三階櫓だったと考えられる」と述べた。

蒲生の城　白石城と若松城

会津若松市教育委員会文化課の近藤真佐夫主幹は、会津藩士の娘で会津出身の新島八重が主人公となっている、平成25年大河ドラマ「八重の桜」の放送開始とともに、1月から「大河ドラマ館」をグランドオープンさせ、新たな観光スポットを誕生させたことを紹介した。

また、天正18（1590）年、豊臣秀吉の勢力が奥羽に及び、翌19年にかけて大名の再配置が行われた結果、それまで伊達政宗の所領であった刈田郡は蒲生氏郷の所領となり、その際に城館の整理や支城の配置が行われ、本城の会津若松城と北に白石城、南に白河城をはじめとする支城が置かれたと話した。そして、若松城は、伊達・最上を防ぎ、徳川を後ろから脅かすもので、領内の一つの城ではなく「豊臣政権を守る城」だった。白石城は単なる領内経営・防備だけの支城ではなく、「蒲生・上杉領の最前線を守る城」。若松城と白石城は、「豊臣政権を見せる城」だったと説明。結びに「蒲生時代の支城のあり方を考える上で白石城は重要な城。この時代の遺構・資料が確認されることや、片倉氏が入る慶長7（1602）年から正保絵図が描かれるまでの間の歴史の解明に期待する」と話した。

仙台藩における白石城

仙台市博物館市史編さん室の菅野正道室長は、戦国時代、全国には4万～5万の城館が存在。白石市内にも約50カ所余りの城館が確認されているが、その大部分が戦国時代のもので、建物は掘立柱式の簡素なものがほとんどだったと話した。

続けて、白石城が徳川幕府の「一国一城令」の例外の城として格付けされた理由にふれ、「片倉景綱が豊臣政権下や初期江戸幕府政権において、伊達氏の家臣でありながら大名として格付けされていたことが伝承・記録に残っていることや、江戸幕府・諸大名から仙台藩重臣の筆頭という認識がなされていたこと、白石城が存在する刈田郡は、政宗が徳川氏から恩賞として与えられた場所で、ほかの伊達領とは扱いが違っていた可能性が高い」と話した。

北日本における近世城郭　白石城

仙台市博物館の金森安孝副館長は、近・現代における城郭の特徴などを説明。戊辰戦争後、城郭は新政府に統治され、転用・利活用がなされたことや、城と城下町で町並みが形成され、地方都市の個性や魅力の中心、城郭を中心とした街づくりが行われてきたことなどを紹介した。

また、東日本大震災被災後の復旧では、「城郭を核とした地域文化・歴史の復興を期待する」と述べ、結びに「蒲生氏郷の重臣であった蒲生郷成、上杉景勝の所領とされ、城代として任じられた甘粕清長、江戸時代を通じて城主として地位を保った片倉氏が、時代背景の中、何を手掛けたのかを調査することに期待。また、明治2年に按察府が白石に置かれたのは、白石が東北地方全体を見据える場所であったということにも注目してほしい。白石城は片倉の城であり、大きな歴史を背負ってきた城。城を守るのはそこに住む人たち。大切に思い、価値を与え、守り伝え、白石の新たな価値を育んでいってほしい」とシンポジウムを締めくくった。

白石城関連年表

天正15年（1587）	豊臣秀吉が関東、奥州に惣無事令（私的戦闘禁止令）を出す。
天正18年（1590）	小田原城落城、豊臣秀吉による奥羽仕置が始まる。蒲生氏郷、会津73万石を拝領、白石城を蒲生源左衛門郷成に預ける。この年以降、支城の白河城、三春城、長沼城、津川城、南山城、塩川城、 猪苗代城、二本松城、白石城ほかの築城、改修が着手される。
天正19年（1591）	九戸政実の乱が起こる。その後、蒲生氏郷が九戸城を改修し、石垣を築く。
文禄元年（1592）	蒲生氏郷が黒川城（若松城）と城下の大規模な改修を始める。
文禄２年（1593）	若松城の天守が完成する。
慶長３年（1598）	上杉景勝、会津領を拝領、白石城に甘粕備後を入れる。
慶長５年７月（1600）	伊達政宗、上杉領の白石城を攻撃する。
８月	政宗、白石城を石川昭光に預ける。
12月	伊達政宗が仙台城の築城を開始する
慶長７年12月（1602）	片倉景綱が白石城を拝領する。
慶長15年（1610）	仙台城大広間が完成する。
正保３年（1646）	地震のため石垣壁櫓等が崩れる。
寛文元年（1661）	破損により再鋳していた鐘が完成し、掛けられる。
元禄５年（1692）	坂口門東厩曲輪南之方土手土留石垣が崩れる。
享保16年（1731）	大地震にて石垣、櫓、堀等多くの箇所が損壊する。
寛保３年（1743）	御勘定所で出火がある。
文政２年（1819）	白石城が焼失する。
文政６年（1823）	大櫓が再建される
文政12年（1829）	御城巽角櫓、石垣四カ所が完成する。
明治元年10月（1868）	白石城が片倉家より白川口総督府へ引き渡し。
明治２年４月（1869）	白石城を南部氏へ引き渡し。
８月	南部旧白石藩知事が白石城へ入城する。
明治３年９月（1870）	三陸磐城両羽按察府廃止、白石城は旧片倉家中開拓役所預かりとなる。
10月	白石城売却代金を北海道開拓費用に充てるよう願い、元按察府の許可を得る。
明治４年４月（1871）	旧白石城が兵隊屯所となり、御親兵が入城、三の丸の居家を壊して調練場として洋式調練を行う。
明治７年（1874）	白石城を家禄奉還士族、御代田円八ら５名に払いさげ、解体される。
明治33年（1900）	東宮殿下御慶事記念として白石城址を益岡公園とすることに決定する。
大正４年（1915）	片倉小十郎景綱公頌徳碑が本丸跡に建てられる。
平成７月５月（1995）	三階櫓、大手門が復元公開される。